

ハモ *Muraenesox cinereus*

ハモは自身のおいしい魚ですが、非常に小骨が多いことから、「骨切り」と呼ばれる、皮を切らずに身と小骨だけを細かく切る処理を施します。骨切りをしたハモの身は、湯引きになどにして食べます。また、骨切りをしない場合は、かまぼこなど練り物の原料に利用されます。ハモは特に京都で珍重され、祇園祭の時には高値で取引されます。

近縁にスズハモという大型になる種があり、ハモ漁で混獲されますが、目の後ろにある骨のふくらみがないこと、肛門までの側線孔数が少ないこと（スズハモ：39以下、ハモ：40以上）、脊椎骨数が少ないこと（スズハモ：126～138、ハモ：146～157）で区別されます。

生物特性

ハモは細長く、死後硬直すると全長が測定しにくい場合があるため、肛門よりも前の長さを肛門前長（以下、PL）と呼び、大きさの指標にします。ハモの全長と体重の関係は、全長 50～60cm（PL20～23cm）が 150～200g、全長 70cm（PL29cm）が 400g、全長 80cm（PL34cm）が 800g で、主に漁獲されているハモで大きな個体は PL50cm、体重 2～3kg になります。

成長は雄雌で異なり、雌の方が大きくなります。雄の成長は、2歳が PL12cm、4歳が PL23cm、6～7歳です PL30cm です（図2）。雌は、2歳が PL12cm で雄とほぼ同じですが、3歳で PL20cm、4歳で PL30cm、6歳で PL40cm となり、体重が 2kg を超える PL50cm の個体は 10歳以上

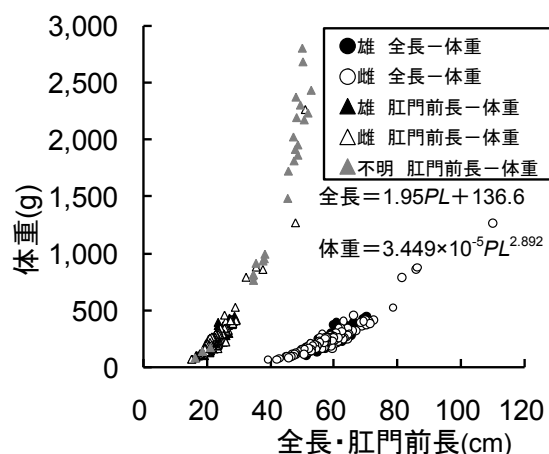


図1 高知県産ハモの体重と全長・肛門前長の関係（平成18～20年）。

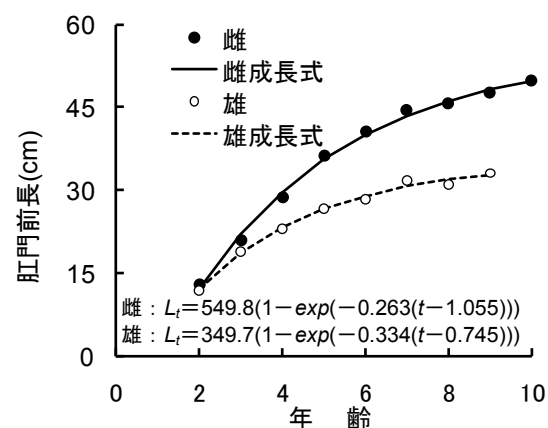


図2 高知県産ハモの年齢と大きさ（肛門前長）の関係。

と考えられます。

高知県産ハモの産卵期については十分なデータが蓄積されていませんが、断片的な調査結果や徳島県の詳しい調査から、夏期の7～9月と考えられます。

資源動向

高知県下のハモ漁獲量は昭和40年(1965年)に267トンでピークを迎えた後、大きく減少し、平成11年(1999年)には7トンと昭和40年(1965年)の約3%まで落ち込みました。しかし、平成14年(2002年)以降、ハモ漁獲量は回復傾向を見せ、最近では50トン前後が水揚げされています。

底びき網漁業によるハモの漁獲効率(CPUE)は近年増加しています(図4)。この原因は、他の資源が減少しているためにハモへの依存度が上がっていることと、ハモ資源の増加の可能性が挙げられます。

徳島県や愛媛県など、近隣県でもハモの漁獲量が増加していることも考慮すると、高知県におけるハモ資源の水準は「中位」、動向は「増加」傾向にあると考えられます。

県内の漁獲動向

高知県のハモ漁業は延縄を含む釣と小型底びき網が主体です。延縄は上ノ加江、久礼、下ノ加江が有名で、小型底びき網は高知市(御豊瀬・浦戸)、須崎市、黒潮町(佐賀、入野)沖に漁場があります。最近では沖合底びき網の漁獲量も増加していて、平成21年(2009年)の沖合底びき網漁業によるハモ漁獲量は11.3トンでした。

ハモの漁期は延縄が4～8月(図5)、小型底びき網漁業は禁漁期(高知市沖小型底びき網は1～3月、図6)以外のすべての月ですが、主漁期は夏です。これは、夏に関西での需要が増加し、単価が上昇することと大きく関係しています。



図3 高知県におけるハモ漁獲量の推移(昭和35～平成18年)。

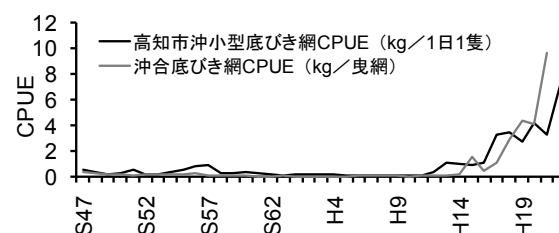


図4 高知市沖小型底びき網と沖合底びき網によるハモの漁獲効率(CPUE)の推移(昭和47～平成22年)。

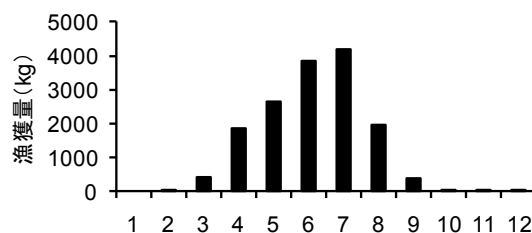


図5 下ノ加江の延縄による月別平均漁獲量(平成15～22年)。

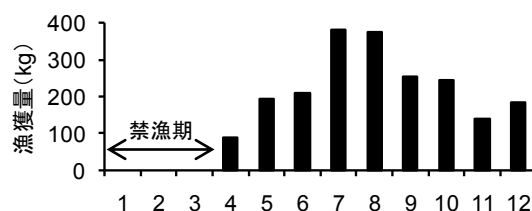


図6 高知市沖小型底びき網による月別平均漁獲量(昭和47～平成22年:中央水研の調査による)。